昭和二十四年七月二十二日第三種郵便物認可
昭和三十年十二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第八十一号）

慈光

第七卷　第十二號

目次

教信沙弥の定まり……花田正夫…(1)
親様の手織りの着心地……近角常観…(4)
三つの往生（前奏曲）……福島政雄…(9)

教信沙彌の定なり

花田正夫

聖人の七百回忌をお迎へ申す準備も、すでに各本山や、有志の人々によつて種々に取沙汰せられて居り、夫々に意義深い行事も執り行はれることと思ひます。斯うした世代に生れあはせて貰つた私共の喪心からの念願は、聖人の真面目におあひ申したい、たとへその片鱗にすぎなくても、本当の聖人に接したいといふ一つにかかつて居ります。

それにつけても、万が一にも聖人が何処かにましますならば、歎異抄の二条にあるやうに、身命をかへりみずして、百千の里程も越えて、御たづね申すことでありませうが、哀れ温顔は寂滅の煙と化し、徳音また無常の風に障へられた今、天を仰ぎ、地に伏して、悲泣雨涙し、恋慕涕泣すとも詮のないことであります。

嗚呼然し、幸にも、このしてみやうのない身に、聖人の常の仰せが残されてあります。すべて「常の御持言」といふものは、その人の心の身体であります。その言葉を聞くことがそのまま、その人に会ふことであります。そこに聖人御滅後七百年の今日、なほ聖人に直面出来る道がある、それは、聖人の常の仰せを聞きまつる道であります。

さて聖人の常の仰せは、唯円大徳と覚如上人によつて三つ伝承せられて居ります。その一つは先月号に述べました『信謗共に因となりて、同じく往生浄土の縁を成ぜん』であり、今一つは『弥陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業を持ちける身にてありけるを、たすけんと思し召したちける本願のかたぢけなさよ』であり、第三が『我は是れ賀古の教信沙弥の定なり云々』であります。

本月は、第三の常持語について、聖人の思召しに浴したいと思ひます。さて沙弥とは形は僧形をして居りましても未成年のために、戒をうけず、比丘衆とならない、十二・三の者の呼名でありますが、後になつて、外形は僧形をしながら、生活は世俗に同じてゐて、妻子を帯びて、世の常の仕事を続けてゐる人々の名と転じたのであり、教信はその

代表者であります。

伝記によりますと教信は奈良の興福寺で学問修行をしてゐましたが、不図決心するところがあつて、寺を出で、跡を晦して身に灰をぬり、西を指して旅し、播州賀古川の西野口に辿りつきました。此地は西が遠く晴れて極楽を欣ふに格好の地であると喜び、そこに草庵を結び、髪を剃らず、爪をも切らず、袈裟や衣を着せず、妻も持ち子も持つて、或は里人にやとはれて耕作したり、或は旅人の荷物を運ぶなどして衣食し、その間常に弥陀仏の御名を称して昼夜休む時がないといふ風でしたから、世間の人々が『阿弥陀丸』と愛称し、教信自身は、念仏のほかは万事を忘れたやうでありました。

さういふ生活を三十年続けて、定観七年八月十五日に亡くなりましたが、葬る資産もなく、家の前に捨てられて野犬が群り喰ふといふ始末でありました。

時に摂津の弥勒寺の勝如、浄土の業として無言の行をして居り、世の人々はこれを無言上人とたたへて居りました。その勝如のところに、教信の霊が来て『今まさに往生する』と告げました。

あまりの不思議さに、勝如は、弟子の勝鑑をして賀古川に往かせました。そこで村人や、往還の男女、道俗がこれを伝へきいて雲集し、屍骸をめぐつて歌ひ讃へました。

勝如はこれを聞いて『自分の長年の無言の行は、教信の念仏に及ばない』と、歎息したさうであります。

教信沙弥の生涯は大体この様でありましたが、禅林寺の永観も非常に景慕せられ、わが祖聖の如きは『わが理想の人物である』と常に仰せられたのであります。

この聖人の常の仰せを裏づける大切な金言を私は今二つ想ひ浮べる。その一つは、聖人八十五歳の御作の愚禿鈔に

『賢者の信を聞いて、愚禿の心を顕はす。

賢者の信は、内は賢にして外は愚なり。

愚禿の心は、内は愚にして外は賢なり。』

と上下二巻の冒頭に同文を重ねて誌されて居ります。

又、八十八歳の三帖和讃の総結文とも申すべき、自然法爾章の末文に

『よしあしの文字をもしらぬひとはみな
まことのこころなりけるを、
善悪の字しりかほは、
おほそらごとのかたちなり。
是非しらす、邪正もわかぬこの身なり。
小慈小悲もなけれども、
名利に人師をこのむなり。』

と、これは聖人の御生涯の御筆の擱きしまひでもあります。そこに『内愚にして、外賢なり』とも『名利に人師こ

のむ』とまで慚愧せられる聖人の御心の奥に、賀古の教信沙弥の姿が燦然としてかがやいてゐるのを拜するのであります。

真実のひかりに触れる者は、自らの虚仮、雑毒の姿が、おのづとそこに照し出されて、この虚仮なるもの、この不実なる者の故に被る　遠くしてはるかなる慈恩を謝し奉らすには居られないのであり、斯く申すまでがすでに御恩であります。

憶へば三十五歳の御法難を機として、僧にあらず、俗にあらず、愚禿親鸞なり、と名告り続け給ふ聖人の心底を貫ぬくものこそ『我は是れ、賀古の教信沙弥の定なり』の金言でありました。

さて想ひを遠く鎌倉仏教に走せます時、平安末期から停滞し腐敗した仏教が、親と子と血を流し、弟と兄が争ふといふ保元平治の乱や、源平の戦に際会し、更に天災地変の打ち続く危急の秋、何の救ひ、何の光をも放ち得ず、無力化して了つてゐました。ここに鎌倉時代を期として新人仏教の動きが活潑となり、自づと持経者と沙弥生活者の二群の動きがあらはれました。

持経者は律法主義、厳格主義を標榜して、釈迦の昔にかへり、戒律を守り、立派な生活、清浄な生活をして世の光明となり、世間を救済しようと願ふ人々であります。解脱上人は笠置に隠遁して名利の塵を払ひ、梶尾の明恵上人は六根の清浄を得て高く地を照されました。俗人の方にも焼身供養といつて、炎々と燃える火の中に身を投げて、仏様に献じて、濁り乱れ狂うた世のゆり醒まされることを願つたのであります。

これにひきかへ沙弥生活者は、世俗の泥にまみれ、世の濁りをわがこととして仏前に全体を打ち明け、そこに泥田にひらく蓮華の如き仏心を仰いで、内心に深く仏法をたくはへる人々で、法然上人、聖覚法印、親鸞上人をその代表者とするのであります。

さて歳月は流れて七百年になりました。その歴史の流れに立つてかへり見ます時、持経者の生活は立派であり、厳格であり、尊いものでありましたけれど、その後を受ける者が消えて行きました。ところが、内心に深く仏法を頂いて外相は世俗の生活に同じて送る沙弥生活者の群は、年々歳々に相承せられて、今日に及んで居ります。その沙弥生活者は、自分の力で世を救ふの、人を助けるのといふ、所謂世の指導者、先達めいた姿は無く、世と共に同じつつ、そこに光明を仰ぐ、そのまんまが、星月夜となつて地上の夜の闇を破つて、ほのぼのと道を照し出す如く、身に受けた光を照り返して行くのであります。

『親鸞弟子一人も持たず候』とは、沙弥生活者の眼に明かに知られる赤裸の姿であり、同時にそのままが、一切人の大導師としてのひかりをおのづと放たれる麗容であります。私はここに、敗戦拾年の日本に、持経者的言動や、その動向の見られるにつけ、聖人の生涯をとほして御信嘗下された『沙弥生活者の道』を、こよなき道と渇仰おくあたはぬものがあります。

完了

親様の手織りの着心地

近角常観

親鸞聖人は吉水の法然聖人の御法縁によつて、その選択本願、南無阿弥陀仏の御教化を蒙り、その法然聖人の仰せの南無阿弥陀仏は、唯着さへすればよいといふ六字の着物に非ず、此の一枚は、実に、自分如き乱暴者に着せよう、着せようとの、親のお慈悲の塊の着物であると頂いて、

智慧光のちからより　本師源空あらはれて
浄土真宗をひらきつつ選択本願のべたまふ

と、一代の間南無阿弥陀仏〳〵と喜ばれたのが、親鸞聖人の信仰である。

ところが一緒にお聞きになつてゐた三百八十余人の弟子方も、これだけの訳合がわからぬはづは無い。御同様が、話したり。聞いたりしてさへ分るのであるから、これだけの筋合は皆わかつてゐたのである。

それに何故に間違が起つたかといへば、これは本当に自分の身に頂けてなかつたからである。三百八十余人の人はどう思つて居たかと言ふに、耳に御師の仰せを頂き、口に南無阿弥陀仏を称へらるる有様は、如何にも、親の織り上げて下された着物を喜んで居らるるやうであつたけれども、心の中には、親の手織よりは、人の着てゐるやうな綺麗な着物が欲しいといふ思ひがあつたのである。

故に身には親の手織を着ながらも、心では人の着物を羨んで居たもので、口には一心専念に念仏を称へづめにして居つても、心は『もつと修行して、よくなりたいな。あの

人はあの修行してあんなに善くなつた、自分もあのやうになりたいな』の思ひで着てゐたのであるから、着ながらも、これでは一心に専らとはならぬのである。

私が信仰上、修養を言ふを嫌ふのはここである。修養したいと言ふ人は、みなこれになつてゐるからであります。故に、御同様もここはよく気をつけなくてはならぬ。

恥かしながらも私の経験をいふと、私は小供の時、親から手織の着物を貰うて着ながらも、心中には友達の着てゐるやうな綺麗な着物が着て見度くて仕様がなかつた。都合によると、自分でこしらへて着ようかとさへ思つた事まである。仕舞ひには、自分は人のやうなのを着たいにも着られぬから、仕方なしに自分は、南無阿弥陀仏〳〵と親のこさへて下さつた手織を着てゐたのである。手織は外見はきれいではないけれども、之を着てゐる方が質朴でよいのであると、手織を着てゐるのを誇りとし、念仏を称へるのを飾にするやうなことになる。

或は『自分は念仏を喜ぶのであるから、現世祈はせぬ。せぬと言つたら断じてせぬ』と我慢で親の手織を着るやうなことになる。さういふやうな心は皆、親が着よと言はれるから着ねばならぬと、無理に着る気になつてゐるからである。

世の中には、念仏を喜ぶ傍に随分ことの現世祈がある。切角、親の手織を着てゐるものが、斯く一方人の着物を欲がつてゐるやうのことでは何もならぬ。

そこで一方、他人の着物をほしがるにも、その人〳〵により千差萬別である。故に蓮如上人は『改悔文』の上にて

『もろ〳〵の雑行、雑修、自力のこころをふりすてて、一心に阿弥陀如来、我等が今度の一大事の後生、御たすけ候へとたのみ申して候』

即ち、百人、千人、萬人、各々、その人〳〵に従つて、夫れ〴〵の雑行、雑修、自力の心にほだされてゐるから、本当の手織の親心が頂かれぬ。故に三百八十余人の人々は、皆同様に、法然聖人の本願念仏の教を聞かれたのであるが、いざとなると、信の座につかれたは法印大和尚聖覚、釈信空上人法蓮、熊谷直実入道、及びわが親鸞聖人の僅かに四五輩に過ぎなかつた。

さて然らば夫等の人々のさういふ聞き方になつた間違ひの源は何処にあるか。全体私共が親の手織を身にしながらも、猶ほ他の着物を羨ましくなるといふのは、親の方より『先づ汝、自分のからだをよく考へて見よ。汝が他の着物が着られる身分なら、親は何もこんなに心配はないのである。しかるに汝のやうな性分には、他の着物では間に合はぬ。何程力みても、汝の力みは、空力みである。

汝は汗かきの仕て見やうのない悪い性分である。故に汝のために、わざ〳〵辛苦して仕立ててやつた此の一枚の手

織であるに、ほかの着物が着たいといふは、汝は自分の身体の事を忘れて居るからぢや。汝が他の着物が着られる位なら、親は何して長の修行してこの苦労を仕ようや』

との親の真実の御心が頂けてないからである。

『これは、そも〳〵『選択集』の本願の文に「この念仏は愚痴無智、破戒無戒の仕て見やうなき者のためとある。」その破戒無戒、愚痴無智は、他の浅間しい人の事と思うてはならぬ。先づ汝の身の上のことを考へて見るがよい。選択本願の功能書には、乱暴者の汗かきに着せるためというてあるけれど、その乱暴者の汗かきとは、即ち、汝自身の事をいふのである。若し汝が欲する如く、他の着物が着られる程ならば、親は何しに此の手織をこしらへあげようや。他人の着物を羨むよりは、先づ第一自分自身の身の様を気をつけて見るがよい』とのやるせなき親の仰せなのである。すなはち、機の深心が他力である、といふ味ひはこれから出て来るのである。

即ち私など此の御心が分るまでは煩悶に煩悶を重ねたけれど、結局何とかして善く成りたい、何とかしてよくなりたいの思ひしかなかつたのである。

又親鸞聖人でも、法然聖人でも、二十九歳、四十三歳の御時までは『どうしてもいかぬから、何うしてか光を見つけたい〳〵』で岩をもひしぐ勢でもとめられたのである。けれども、何程藻掻いても、矢張りこの身はもとのほろほろの姿である。ここになると最早何ともして見やうがない。そこを和讃には

三恒河沙の諸仏の　出世のみもとにありしとき
大菩提心おこせども　自力かなはで流転せり

御同様も皆これなのである。そこへ今、仏は『汝自分の力でそれが出来ると思うてるか、出来ると思ふはまだ自分の価値を知らぬから、そんな自惚を思うて居るのぢや。

汝は到底その器でないことを、我ははやくから見抜いたによつて、かねてより、煩悩具足の凡夫、いづれの行にても生死をはなるることあることなしと呼んで居るでは無いか。その五逆十悪の汝が哀れで捨てられぬから、我はそのものが心配なく着られるやうに、此の手織を作つたといふてゐるではないか。この手織を作つたには、親の一針、一箴も、どうかして汝に着せたい、纏はせ度いの、親の涙の塊でこさへ上げた着物故、唯一枚の着物なれど、何とか親の心を受けてくれ』

と斯う思ひがけなく親の方より言ひかけられたが、仏願の生起本末である。即ち、南無阿弥陀仏の六字は、これを無明無実に聞くでない。善知識に遇ひ参らせて、この六字は人のためでない。実に私一人のために御成就くだされた親の大悲の塊であることを頂いたが、仏願の生起本末を聞いたのである。

『教行信証』の信巻の別序には

『夫れおもんみれば、信心を獲得することは、如来選択の願心より発起し云々』

とある。そこでひとたびこの広大の親心を聞かして貰うて見ると、今日まで『どうかして、もつと善くしたい、外の着物も着られよう』と思つて居たのが、実に傲慢不遜の申しわけなき間違であつたと分り、そこになると『弥陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業を持ちける身にてありけるを、たすけんとおほしめしたちける本願のかたぢけなさよ』である。

それを皆が、自分もひとかど、他の着物が着られるもののやうに思つてゐるから、南無阿弥陀仏はどんな悪人でも着られる手織り故、結構であるが、併し何も今迄ある着物を捨てるにも及ぶまい、といふやうな聞き方になり、諸行往生のあやまりにおちる。

親鸞聖人の御示しには『有るものなら着てもよい』とか『出来ることなら仕ても善い』といふやうな分子は一分一厘もない。設ひ出来たとて、我々の善はみな虚仮、詔偽である。皆地獄行きの種である。出来ることとて一つもあるのではない。

歎異鈔の第二に

『その故は、自余の行をはげみて仏になるべかりける身が、念仏を申して地獄におちて候はばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔も候はめ、いづれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし』

とある。何程善いことをしたいかとて、我々は仕度くもすることが出来ぬ。『選択集』に破戒無戒とあるは、わがことである。愚痴無智とあるは自分のことである。すでに御自ら愚禿と名告らせ給ひて、斯くの如き極悪深重の『極悪最下』の自分のために『極善最上の法』をとかれた。かく仕て見やうなき自分のために、思ひがけなき広大の御哀みが、本願の親心である。これが最も有難い処である。即ち『聞其名号』の聞の字の味ひは、この私一人がために、長の仏の御苦労であることを聞くが、聞の味ひとなるのである。

然らば、最早聞くばかりとなる。それでは此の本願の御心を聞かされて、成る程さうであつたかと、分つただけですぐ信心かと言ふに、唯さう分つただけで、それきりで放つておくのでは何もならぬ。

私は西洋から帰つた時に、親から手織の着物を貰ひ、一二度着ただけで放つておいて、大に親に失望させたことがあつた。

即ち『信仰は実験ぢや。一念ぢや。もうわかつた〳〵』と片づけてしまつて、切角の親の手織を平生着ぬのでは何

もならぬ。若し真に曾無一善の自分如き者のために、親がかくまで思召して作つて下された御心が有難いならば、設ひ自分は病気で、着るだけのゆとりがなくて『ああ有り難い』と喜んで、枕許にたたんで置くのでも着たのである。

『歎異鈔』第二に

『弥陀の誓願不思議にたすけられ参らせて、往生をば遂ぐるなりと信じて、念仏申さんと思ひ立つ心のおこるとき、即ち摂取不捨の利益にあづけしめ給ふなり』

とあつて、思ひ立つ心の起つた丈で、まだ実際、声に念仏があらはれずとも、頂いたには違はぬが、併しかく頂いた者が、次の瞬間から、生命あらばどうして着ずに居られようと言ふのである。

そこは聖人の御自督の如く『唯念仏して彌陀に助けられ参らすべしと、よき人の仰せをかうぶりて信ずる外に別の仔細なきなり』と頂いた者であるならば、どうしてもその頂いたお言葉通り、南無阿弥陀仏と口に念仏があらはれて来ねばならぬのである。『信巻』に『真実の信心には必ず名号を具す』と仰せられたはこれであつて、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と念仏の出るのが当然である。

故に聖人が信心為本とお示し下されたればとて、念仏を称へぬと仰せられるのでは無い。『末燈鈔』に『信心ありとも名号をとなへざらんは詮なく候』とあるが、併し何程着ることが肝腎であればとて、訳分らずに、唯着るのだけ

るのだと、一途に南無阿弥陀仏を称へるだけになつてしまつては、矢張り法然聖人の御教化を聞き違へした三百八十余人の人達も同じやうの過ちになつてしまふのである。即ち着んならぬ〳〵と唯着る丈に力を入れて、しらず〳〵の間に、肝腎の親心の方が空になり、南無阿弥陀仏だけになつてしまふから、聖人は今の『信巻』の御言葉のあとに『名号には必ずしも願力の信心を具せざるなり』とあるのである。

即ち初めから南無阿弥陀仏の着物ぢや〳〵となると、肝腎のその着物を御作り下された親の御心の方をそつちのけにして、唯着物ばかりに目をつけるから、それでは折角の親の手織が、親の手織でなくなつてくる。即ちここが法然聖人の念仏為本の御教化を、親鸞聖人が信心為本と御知らせ下された所以である。

弥陀大悲の誓願を　ふかく信ぜん人はみな
ねてもさめても距てなく　南無阿弥陀仏を称ふべし

この御和讃は、この意味をうたはれたものであります。

大正六年三月号、法蔵所載

×　×

三つの往生

福島政雄

前奏曲

仏、阿難に告げたまはく。

『十方世界の諸天人民　それ至心に彼の国に生ぜんと願ずる有らん、凡そ三輩あり。

その上輩とは家を捨て欲をすてて沙門となり、菩提心を発し、一向に専ら無量寿仏を念じ、諸の功徳を修して彼の国に生ぜんと願せん。此等の衆生は寿終の時に臨みて無量寿仏、諸の大衆と其の人の前に現ぜん。印ち彼の仏に随ひて其の国に往生し、便ち七宝華の中において自然に化生し、不退転に位し、智慧勇猛にして神通自在ならん。是の故に阿難、それ衆生ありて今世に於て無量寿仏を見んと欲せば、まさに無上菩提の心を起し、功徳を修行し、彼の国に生ぜんと願ずべし』

仏、阿難に語りたまはく

『その中輩とは、十方世界の諸天人民、それ至心に彼の国に生ぜんと願ずるあらん。行じて沙門となり大いに功徳を修すること能はずと雖も、まさに無上菩提の心を発し一向に専ら無量寿仏を念ずべし。多少に善を修し、齊戒を奉持し、塔像を起立し、沙門に飯食せしめて、繒を懸け、灯をともし、散華焼香し、此を以て廻向して彼の国に生ぜんと願ぜん。その人臨終に無量寿仏、その身を化現し、光明相好つぶさに真仏の如く、諸の大衆とその人の前に現ぜん。印ち化仏に随ひてその国に往生し、不退転に住し、功徳智慧ついで上輩の者の如くならん』

仏、阿難に告げたまはく

『その下輩とは、十方世界の諸天人民、それ至心に彼の国に生ぜんと欲するあらん、たとひ諸の功徳を作すこと能はずとも、まさに無上菩提の心を発し、一向専意に乃至十念、無量寿仏を念じ、其の国に生ぜんと願ずべし、もし深法を聞きて欲喜信楽し、疑惑を生せず、乃至一念、彼の仏を念じ、至誠心をもて其の国に生ぜんと願ぜば、此の人臨終に夢の如く彼の仏を見たてまつり、亦往生を得、功徳智慧次いで中輩の者の如くならん』

これが三輩往生の御文でありますが、この三つの往生と

いふことを問題にしてすこしばかり申し述べて見たいと思つて居りますが、十分に話が出来ればよいがと実はあやぶんで居ります。

で、三輩往生と今読みましたやうに上、中、下、の三輩、そしてそれぞれすこしづつ違ふ、違ふのでありますけれどもまた通じて居るところがあるわけであります。

通じてありますところといふのは、この菩提心を発す、一向に専ら無量寿仏を念ずる、さう云うところであります。もつともそこもすこしづつ違つて居りますけれども、大体菩提心を起すといふこと、一心に専ら無量寿仏を念ずると、これだけは三輩に通じて居りますと申してよからうと思ひますのであります。

難しいことを申せば、三輩往生といふのは観経の九品の往生とどういふ関係になるかとか、いや九品の往生は詳しく述べてあるのであり、こちらは簡単に述べてあるのである、といふ見方をなさる方もあり、それと違つた見方をなさる方もあるやうであります。

然しまあそれは専門の御講者の問題であり、大体私は今晩は、ここを拝読して感じたところを申し上げて見たいと、かういふ積りであります。

何よりも第一に、菩提心、無上菩提心といつてありますが、この菩提心を起すといふことが中心問題になつてゐると思ふのであります。その菩提心を起すといふことは、皆様始終聞いて居られますやうに、自分が仏陀の境地、仏陀のさとりの境地にまで達したいといふ心をおこすといふことでありますが、ところが親鸞聖人のお言葉によりますといふと矢つ張り菩提心といつても、聖道の菩提心、それから浄土の菩提心と云ふ風に分けて居られまして、正像末和讃には

自力聖道の菩提心　こころもことばもおよばれず
常没流転の凡愚は　いかでか発起せしむべき

といふ言葉で始つてすこし菩提心のことをおうたひになつてゐます。それから浄土の大菩提心の方は、

浄土の大菩提心は　願作仏心をすすめしむ
すなはち願作仏心を　度衆生心となづけたり
度衆生心といふことは　弥陀智願の廻向なり
廻向の信楽うるひとは　大般涅槃をさとるなり

とあります。その弥陀智願の廻向なりといふところが、非常に大事なやうに感ぜられて居ります。無上菩提の心を起す、これは一体仏教においては中心問題でなければならぬのでありますが、今のやうに聖道の菩提心といふことになると、とつても自分としては駄目であると、かう打ち明けて仰言つてゐる。そして浄土の大菩提心の方は、弥陀智願の廻向でありますから、弥陀の智慧からたまはるところのものであると、それはそして、度衆生心、諸の衆生を度

したいといふ心である、かう云う心持であります。

で、無上菩提、仏陀の境地までといふ心持をすこし世間の私なんかに解り易い方に引き直して考へますといふと、無上菩提心を発すといふことは、結局、この世の一切を離れるといふやうなことが大事なことになつてゐるかと思ふのであります。

この世の一切の欲、財産の欲も、その他の欲もすつかり離れると、そしてこの世において何一つ自分が摑むといふものがないと、そしてただ仏のさとりの境地を求めるといふことでありますが、ついこちらに参ります前に、久し振りに私はフランスのユーゴーのミゼラブルを読んで見ましたのであります。実は私がミゼラブルを以前に始めて全体を読みましたのは、今から四十五六年前、二十一歳の時でありまして、英訳本でずうと読んだのでありますが、今度読みましたのはそんな全訳でなくて、御承知でありませう黒岩涙香さんの『噫無情』といふ題で、大体の節をよく述べてある、あれを二晩かかりでズート読んで見ましたのであります。そしてあの中心人物でありますところのジャンバルジャンの問題といふものが、私の問題でもあるといふことを感ぜしめられました。

そのジャンバルジャンは御承知の通りに盗みを働いて獄に入れられ、獄を破つて逃げてまた獄に投ぜられる、さう云うことを繰り返して居ります。然し刑期が満ちて最初に世の中に出ましたが、誰れも泊めてくれない、一晩泊めてくれといつても何処からも断られて、ミリエル僧正のとこに行つて僧正の寛容の態度にぴつくりする。

ぴつくりするけれども夜中になつて盗み心がおこつて、銀の皿でありますか、それを盗んでそつと逃げて行く。明くる日は警官に連れて来られる。それに対してミリエル僧正が、それは与へたのでありますといはれるのであります。それで警官も仕方なしに釈放する、その時ミリエル僧正は、あの銀の燭台も一緒にあげたのに何で持つて行かないかといはれました。

さうなつて見るとジャンバルジャンとしては夢に夢みる心地といふやうな風になつて参る。然しジャンバルジャンとしては兎に角そこを出て行く、出て行くときに、ミリエル僧正がソート出て行つて

「あれをあんたにあげるが、あんたが真人間に立ちかへるといふ約束をしたことを忘れないで下さい」

とかう云はれる。彼はそのまま夢のやうに出て行つて、やたらに走つて、野原まで出て行つて、その野原ではもう一度悪いことをする。小供が銀貨をほうり投げて遊んでゐたが、その銀貨を足の下にしいてかくしてしまつて返さない。小供は泣きながら行くといふやうなことがあつてから大分たつてから、始めてわれにかへるのであります。その

時からジャンバルジャンの転向と申しますか、すつかりこの心の底から立ち直るといふことが始るのでありますが、その後、御承知の通りに或町に行つて工業を始めて皆のために財産が集るといふやうなことをして、段々と大儲けをしますが、自分の罪悪を思うて、種々と非常な施しをするのであります。

それから非常に正直に仕事をやつて行くとなつて、皆の人望が集つて来て、その町は非常に富み栄えるといふことになつて、しまひにその町の市長、マデレン市長と呼ばれるまでになるのであります。

丁度その頃、獄を破つて逃げたジャンバルジャンが捕づたといふやうなことがありまして、それはほんたうのジャンバルジャンではないのでありますけれども、もうジャンバルジャンに間違ひないとなつて法廷において裁きをうけるといふことになる。

その時彼は非常に考へさせられて、自分がジャンバルジャンであるのに、その人は間違つてジャンバルジャンといふことに決められて了つて、今度は終身刑になるのださうだ。それはいかぬ、自分がそこに出て、自分が本当のジャンバルジャンであるといふことを、どうしても云はねばならぬと思ひますものの、一方では自分は此の土地を去つて、ジャンバルジャンであると告白すれば、この土地の栄えは忽ちに駄目になるし、自分の名誉は勿論地に堕ちてしまつて、終身刑で獄屋の生活をしなければならぬ。さうして、その二つの問題の間に心がもつれあふのであります。決してジャンバルジャンは、そこに自分がジャンバルジャンと名告つて出るのが本当であるから名告つて出るといふハッキリした決心でもつて行くんぢやあないのであります。さん〳〵その中で思ひ乱れた末、どうしても立つても居ても居られぬやうになつて、その時の法廷のひらかれてゐる町に行く。その時のジャンバルジャンの心の中の葛藤はどうでありませうか。何もかも捨てて自分がジャンバルジャンであると覚悟するのか、今のままで、誰も知らぬのであるからして、このマデレン市長で続けて行くか、そこで、自分の決心でなしにどうしても行かずに居れぬやうになつて、法廷に行つて、自分がほんたうのジャンバルジャンであるといふことを告白するといふ、そこのいきさつといふものが、ジャンバルジャンが自分の力でハッキリした心を起すのぢやない、然しさうせざるを得ない、或る深い大きな力に催されて、その法廷に飛んで行くといふやうなことで先づ非常に考へさせられたのであります。

然しまあジャンバルジャンと云ふことになつて獄屋に入れられたけれども、その前に自分の工場でやめさせられてひどいことになつた、ファンテイーンといふ女が、自分の子供を他所に預けて、養ふために髪を切り、歯を打ち缺い

てしまつて売つてゐるといふことや、その女がマデレン市長をしんから恨んでゐるといふ、さうしたことを一一聞いて、どうしてもその子供を助けにやならんといふことになる。然もその母親は病気になつて段々死ぬる時が近づいてゐるといふ問題がおこりました。そこでまた牢獄を破つて、今のうちに死んだファンティーンの残した子供コーセットといふのを尋ねて行つて、そしてパリの貧民窟といふやうなところへ連れて行つてそこに隠れ住んでそれを育てるのであります。

そこのところを細かに読んで居りますといふと、ジャンバルジャンは「もう自分にとつては親もなければ子もない自分は独りで、親戚も、自分に好意のある知人もない」といふところになりまして、ただ、そのコーセットといふ子供を育てて行くといふことに打ちこむといふ、打ちこむにしたがつて何ともいへない、親の愛情に似たやうな愛情が湧いて来る。そしてこれを離れては自分は生きて行かれぬといふ気持にまでなつてくる。

そしてのちにコーセットを想ふマリウスといふ青年がありましてから、コーセットと非常に深い恋愛におちいるのであります。ジャンバルジャンはそのことを知つて非常に煩悶するのであります。すけれども、のちにすつかり諦めた気持になつて、その青年にコーセットを与へると云ふ気持になり、そして自分が市長時代までに蓄へてゐたところの沢山のお金を、コーセットの結婚の持参金のやうなものにして、すつかり与へてしまふのであります。

そうするとそれから後はマリウスとコーセットの親のやうな立場におかれて結構に大切にされて暮すといふことになつたのでありますけれど、ジャンバルジャンは落着いて居る気持になれない、どうしても自分の素性を打ち明けねばならぬといふので、とう〳〵マリウスに、自分は斯様々々の前科者であるといふことをスツカリ打ち明ける。

その結果天地が転倒して来るわけであります。マリウスは、はじめは立派なコーセットの後見人として大切に思つて居りましたが、いろいろの点で疑ひ出しまして、段々と疎略に取り扱ふやうになり、ジャンバルジャンはおしまひには自分の素性をスツカリ打ち明けるのでありますが、然し二三まだ大事なことを打ち明けずに居りますものですから、マリウスの方はいよいよ疑ふといふことになつて居りました。ところが不思議なことに、非常な悪者でありますところのテナルディエーといふものの口から、マリウスは、革命戦争の時にジャンバルジャンから助けられた。もう殆んど死骸であつたのをかつがれて、地下の泥の中をズートおぶつて、そして助けてくれたのがこの人であつたといふことが解つて来て、そしてマリウスの心がスツカリ変つて来るのであります。

一方ではジャンバルジャンは、何もかも打ち明けた。そ

してその向ふの取り扱ひはスツカリ変つて来るし、自分はもうこの世の中に居て頼るものは何もないといふ極端な淋しみの底におち入りまして、いよいよ病気になつて、やがて死なうといふ時にミリエル僧正から頂いた銀の燭台にロウソクをともして、ミリエル僧正の想ひ出を唯一の想ひ出として、そこに死んで行くと。

そこまで読みました時に私、非常に感激しまして、涙が出てたまらなかつたのであります。つまり何も彼もこの世のものを捨てて了ふ。自分の愛してそだてた、自分の娘ではないけれども、その娘をも手放す。そしてマリウスにすつかり与へて了ひ、それから自分の素性を打ち明けて自分の名誉も何もすつかり無くなつて了ふ。この世の一切のものはそこにすたつて行つたのであります。そしてそのすたつて行つた時に、このミリエル僧正の精神、心といふものがジャンバルジャンの心の中に生きてくる。これはもうこの世を離れたこころである。さういふことになるのであります。

この世を離れたこころといふことになりますからして、さう云ふものが、つまり自分の欲も、名誉も、いかりも、ねたみも、みんな捨てて了はなければならぬことになつて、ただミリエル僧正の前にひざまづくといふことだけになつて死んで行く。その時に始めて今の大菩提心といふ言葉を使ひますなれば、このジャンバルジャンに無上菩提心が、その時始めて起つて来たのである。

それまでに種々の善根をつみ、困窮した者をたすけ、種々の人によいことをして来た。それ等のことといふものは、結局は何の価値もないのである。この世の一切のものは、みんな価値のないものになつて了つて、そこからジャンバルジャンが永遠に生きて行く一筋の道がひらけて行くのであるといふのが、無上菩提心が起つて来たとかういふ風に考へてよくはないかと思ふのであります。

そして無上菩提心といふものはジャンバルジャンの自分の心が立派でふり起したのではないのでありまして、自分ではならうことなら今の素性を打ち明けたりしないで、新夫婦の後見役になつて、それから老後の一生涯を安楽に過したいといふ気持があつたのが、それがどうしてもその気持を打ち立てることが出来ないやうになつて、一切を打ち明けて、一切を打ち捨てて、ただミリエル僧正に、といふことになつたのからして、今のジャンバルジャンの最後の心を無上菩提心と申しますならば、自力聖道の菩提心といふものではありますまい。自分では立派な心を仲々ふるひ発すことが出来ないのであります。

これだけのことを前奏曲のやうにして申上げて、さて三輩の往生といふことを考へて見たいのであります。

昭和二十九年七月四日夜

慈光第七卷第十二号昭和三十年十二月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十二日第三種郵便物認可

編集後記

歳末となりました。十二月の二日は近角常観先生の御命日であます。大平洋戦争勃発の直前に、御長男は戦死され、宗教法案は無理に通過し、国と世界の大動乱の最中に、念仏の息たえ終られたのであります。

○

ことに先生の御晩年、繰り返し〳〵御信嘗下されたのが

跡戻り〳〵して辿るらん

であります。

甲斐なきことに心まどひて

ありましたことは、誰もよく耳の底に刻まれたことであります。

十二月八日は、釈迦仏の成道会であります。八万四千の煩悩の荒れ狂ふところ、仏陀は菩提樹の下に静かに坐し給うて、その御身から放たれる圓光の下に、転悪成善、衆禍波転の不可思議さを現ぜられたのであります。仏の肉身は滅し給ふも、仏の法身は不滅の光明を放つて、我等煩悩の徒を攝め入れ給うて、転成のめぐみを蒙るのであります。禅家は古来より臘八の接心を続け、求道に白熱される日であります。

愛知県、ことに三河方面では十二月中旬ともなれば、やうやく農繁期から解放された方々が集うて、報恩講の村から村、字から字へと執り行はれることであります。

どうか御無事で、越年、迎春のことをひとすぢに念じつつ本号を発送いたします。

○

△『親様の手織りの着心地』の近角先生の御講話は、先生のどの御講話にも常に繰り返して下された、ものでありまして、恰法然上人の選択集を聖覚法印が唯信鈔に簡結に、然も懇切に御勧め下さるに似て、選択本願の念仏を、嚙んで含める如く、とく〳〵ととけ注いで下さる。一語一句をよく〳〵信味させていただきませう。念仏の要義はこの一文につくされてゐると感佩申して居ります。

△『三つの往生』の福島先生の御講話は、私共の不注意から録音に漏れたところが出来、先生の御腐心により、やうやくまとめて頂きました。今回は前奏曲として、浄土の大菩提心の趣をジャンバルジャンの廻心と最後の心境とに照比されつつ、浮彫りして下さいました。

年の瀬、我身に思ひをひそめるに格好な原稿を頂きました。

△『我は是れ、教信沙弥の定なり』と聖人の常持語の一つでありますが、常持語といふものは底の知れぬ深さと、見渡すことも出来ない広さを持ち、時に大きくひびき、時に静かにひびくもので、それをとほして聖人の真面目に触れさせて頂けるものであります。ほんとに片鱗だにもうかがひ得ないのでありますが、これからそのお味ひをいただく最初の試みといたしました。

御案内

第一日曜が正月一日になりましたので、第二第三第四日曜の午后一時半から講話いたします。

十三日午前午后は、熱田区幡野町願入寺、法話会。

廿四日午前午后は、昭和区小桜町教西寺、法話会。

以上

定価　一部　十七円（送共）
半年　百円（送共）
一年　二百円（送共）
名古屋市南区駅上町二ノ二八
編集・発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　奥川正生
名古屋市南区駅上町二ノ二八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番